

第4章

第1部 第1次アンケート（試行版）調査 大阪府東大阪市小学校教員

小泉 仁・長沼 君主

1. はじめに

本章は「小学校英語活動と中学校英語の連携についての総合的研究－研修の実態と教員の意識調査－」（平成19年度～平成21年度科学研究助成）研究プロジェクトの一環として実施した、第1次アンケート（試行版）調査の結果報告である。2007年11月末、大阪府東大阪市の協力を得て実施した小学校教員に向けたアンケートによる意識調査の結果と内容の分析、そして2008年度に実施予定の本調査に向け考察を行った過程を報告する。

なお、このアンケート調査の概要は、2008年7月21日、福島県郡山市で開催された小学校英語教育学会で「小中連携に関する教員意識への小学校英語教育経験の及ぼす影響－研修の実態と教員の意識に関する一考察」と題して発表した。

2. 研究の目的と背景

この研究は、「英語活動・外国語活動」で指導すべき内容、指導者、研修に対する小学校教員の意識を調査するものである。

現在、全国の小学校において、英語活動として実践されているものは多種多様である。領域としての必修化を間近に控え、この多様さからひとつの方向性を見いだせるのであろうかという重要な疑問がある。また必修化の結果、小学校の英語活動を前提として中学校英語教育のあり方を考えることが必要になり、小・中の連携を図っていくためにも、小学校英語活動の求めるべき方向性を明確にしておく必要があるだろう。ここに、本プロジェクト・チームは、その答えの糸口を見いだすため、小学校教員と中学校教員の小学校英語活動に対する意識の違いを明らかにするための調査することが重要であると考えた。

本章で紹介するのは、全国的調査の準備段階における試行版での調査である。特に、新しい小学校学習指導要領が告示される直前に実施された調査であるため、「外国語活動」が小学校で実施される前の「総合的な学習の時間」での英語活動を踏まえての意識調査であり、サンプル数として数は少ないが貴重なデータであると考えられる。

当初、第2次アンケート調査は、2007年度末にかけて実施する予定であったため、この試行版の第一次調査は夏までに用意する必要があった。しかし、質問項目の準備にあたり、学校現場の具体的状況を十分に把握することが不可欠であるとの判断から、急遽、次年度に実施する予定であった懇談会形式での現場教員の意の聞き取りを前倒しで実施し、アンケート調査はそのあとと決定した。その間、2007年11月7日には、中央教育審議会教育課程部会から「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」が公表され、学習指導要領改訂に向けた先触れとなった。そのため、小学校外国語活動が「領域」として必修化されるだろうことは周知のこととなり、特に、小学校教員のこの問題への関心は否応なしに高まりつつあったが、まだ具体的な学習指導要領も解説も発行されてはおらず、指導資料も未整備であった時期であることを特記しておく。

3. 調査内容と考察

3.1 調査の概要

東大阪市主催の小学校英語活動の研修会（希望者研修）に参加した同市立小学校教員15人に第一次調査（試行版）への回答を依頼した。また、参加者はそれぞれの勤務校へ用紙を持ち帰り同僚に回答への協力を依頼したほか、別の機会として、同市の校長向け研究会に出席した校長に用紙を勤務校に持ち帰るよう依頼し、協力者を募ってもらった。結果として総計で50人（内、1人はほとんど無回答）の回答を得た。実施時期は2007年11月末から12月上旬である。

質問項目の設定にあたっては、ベースとして加納のアンケート項目案を参考に、本研究プロジェクト・メンバーによる討議によって決定した。（＜資料編＞参照のこと）

項目は大きく分けて、次の5つの観点から設定した。

- (1) 総合的な学習の時間での英語活動の実態
- (2) 英語活動に関する担任の役割についての意識
- (3) 英語活動に関する研修についての意識
- (4) 英語活動の内容についての意識
- (5) 中学校英語との接続についての意識

問1から問5は回答者のプロフィールとした。問6から問14までは、選択肢を複数設定した中から1つを回答させ、選択肢に外れるものについて「その他」で回答させた。問15は、複数選択肢の中からいくつでも選択できるようにした。問16から問20は、複数選択肢の中から重要度を判断し上位3つを選択する形式とした。問21から問30は、設問に対する賛否について、リッカート法により、「そう思う ... 4」「どちらかというと思う ... 3」「どちらかというと思わない ... 2」「そう思わない ... 1」の4段階から選択して回答する形式とした。

さらに自由記述欄を設け、小学校英語必修化への不安について、また、その他の意見を書くように求めた。

3.2. 調査結果の考察方法

次に調査結果の考察のための方針を示す。

【回答者プロフィール】

- 1 性別：男性 22人(44.9%)，女性 27人(55.1%)
- 2 教員歴：平均 11.2年
- 3 勤務校所在地：東大阪市
- 4 校種：小学校
- 5 小学校英語経験年数：担任として平均 2.97年(経験者 30人)

この、第一次アンケート（試行版）調査の結果、小学校教員回答者 49人のうち、男性は 22人、女性は 27人とほぼ半数同士であり、平均教員歴は 11.2年であった。英語活動に過去に関わっていた、または現在関わっている人数は、プロフィールに書き込まれた「小学校英語経験年数」が 0でない者をカウントした結果 34人（69.4%）であり、学級担任としての関わりのある（あった）者が 30人(61.2%)、担任以外での関わりのある（あった）者が 4人(8.2%)であった。

次に、各項目について順に結果を考察するにあたり、以下のような方法を取る。

- (1) 問 6 から問 15 については、素データを示し、地域教員全体の傾向を概観する。
- (2) 問 16 から問 20 については回答結果を示す方法が複雑であるため、個々にグラフを添え説明する。グラフでは 1～3位の順位付けに拘らず、選択された合計数を示す。また、併せて、第一番目に選択された結果も示す。
- (3) 問 21 から問 30 については、特に、小学校教員の意識に関わる設問であるが、この部分については、プロフィールへの回答にもとづき、回答者を小学校英語活動の指導経験によって以下のように 3グループに分け、比較分析を行う。

小学校英語経験：	「経験なし」群	15人
	「経験少（1～2年）」群	15人
	「経験多（3年以上）」群	19人

3.3 調査結果の考察

次に、調査結果を質問項目ごとに考察する。

6 小学校英語活動についての研修や研究会に出たことがありますか。

- 1 ある：26人、
- 2 まだないが、受けてみたい：5人、
- 3 ない：18人

小学校英語活動の研修会は、この市では希望者研修であり、26人(53.1%)が「研修経験あり」と回答、「未経験」を上回った。時期的には、ようやく当事者としての意識が高まり始めた頃であると思われるが、アンケートに協力してくれたうちの15人は、研修会の場で調査紙を渡されていることを考慮すると、地域全体の実態よりは「研修経験」が高めに出た可能性がある。「未経験」であるが研修を希望する数は1割程度と、思いのほか少ないのはまだ具体的判断材料が少ない時期であるためだろう。

7 貴校では英語教育をどの程度の頻度で実施していますか。を1つ選んでください。

- 1 週に…平均1.78時間程度：9人、 2 月に…平均1.60時間程度：5人
3 学期に…平均1.42時間程度：31人 4 ない：3人

週1回以上の実施と回答したのは9人だが、これは、特定の、毎週英語活動を実施しているような学校に回答者が偏っている場合も考えうるので、ここで割合を算出することによりあまり意味はない。しかし、ひと月に2回以下の実施というレベルが大多数であるという事実は把握することができる。

8 1回分は何分ですか

- 1 15分未満：0人 2 20分程度：2人 3 30分程度：0人
4 40分程度：0人 5 授業1コマ：41人 6 学年で異なる：3人

これも7と同様、人数による割合の比較にあまり意味はないが、ほとんどの小学校で授業の1コマ(45分)を単位として実施していることが伺われる。

9 英語教育実施にあたり、校内で企画・運営を行う分掌や係などを設けていますか。

- 1 設けている：29人 2 設けていない：13人 3 来年度は設置をする予定：1人

これも7、8と同様に人数による割合を算出しての比較には意味が少ないが、7の数値と合わせて考察すると、1学期に2回に満たない回数の英語活動でも分掌や係を設けている学校が存在することが把握できる。

10 あなたは、その係を担当したことがありますか、または、現在していますか。

- 1 ある：6人 2 ないが、してみたい：4人 3 ない：26人

問1の、研修会経験のある人数が26人であることと合わせ考察するならば、校内の係や分掌として英語活動実施に関わっている教員でなくても、研修会には参加するということになる。一部の担当者にのみ任せておけば自分には関係がない、という姿勢ではなく、小

学校の教員が、自分の問題と理解し始めていることの表れと見ていいだろう。

1 1 ALT や JTE（日本人英語教員または指導員）は、どれくらいの頻度であなたの補助に当たりますか

- 1 毎回：5人 2 毎週1回程度：4人 3 2週間から1ヶ月に1回程度：6人
4 2ヶ月に1回程度以下：4人 5 ほとんどなし：11人 6 なし：11人

1 2 ALT や JTE が、訪問しないときは、誰が担当しますか

- 1 同僚の専任 JTE が担当：0人 2 JTE でない同僚と T T で：0人
3 学生ボランティアや市民ボランティアが担当：0人 4 自分で：30人

問 11, 12 は、回答者の意識というよりは、この調査を実施した市の実態を示すものである。JTE や ALT の訪問もなく地域ボランティアもいない状況があり、学級担任がひとりで行っているケースが多いことがわかる。以下は、教員の実践や意識を反映する回答を求めているが、上記のような現状における回答であることに留意したい。

1 3 ALT や JTE と T T を行う場合の、あなたの役割は何ですか

- 1 主たる指導者：3人 2 翻訳係：1人
3 児童の中に加わりリードする：9人 4 助手：13人
5 児童の管理：8人 6 その他：1人

ここでは、31人(63.2%)がALTの補助的役割をしていると回答しているが、そのうち、9人(18.4%)は児童の英語活動の中に加わり児童をリードする役割を発見していることに着目したい。ネイティブスピーカーとのティーム・ティーチングの中で、日本人の教員がどのような役割を果たすべきなのかについては、その教員の英語運用力や授業構成力などとの関連があって一般化した回答は難しいと思われるが、英語教育の専門的知識も訓練も十分とは言えない小学校教員が模索している結果として、まず、児童の活動そのものに関わることから始めるということは妥当なことに思われるからである。助手としての役割に13人(26.5%)が回答していることとともに考えると、単なる管理者ではなく、主体的な役割を模索しつつあると言える。

1 4 あなたは、自信を持って英語の指導に当たる(参加する)ことができますか。

- 1 自信がある：4人 2 まあまあ自信がある：10人
3 あまり自信はない：20人 4 ほとんど自信がない：16人 [平均 2.96]

指導の自信について肯定的な回答は1と2を合わせ14人(28.6%)であり、3, 4を合

寄せた否定的回答は 36 人 (73.5%) であった。英語運用力の問題もあり、身近な英語活動指導者である ALT は、学級担任が英語活動を行う際のモデルとして自分自身との比較してしまうと自信を持ちづらい。それでも、少ないながら「自信がある」と答える教員がいることは、今後の展開にとっては明るい材料と見なすべきであるように思われる。ALT との役割分担を明確にし、担任として何をやる必要があるのか、何ができるのかを見極めながら、自信をつけることができるような研修内容が望まれる。

15 あなたの得意とする活動は、どれですか。(複数に○をつけても可)

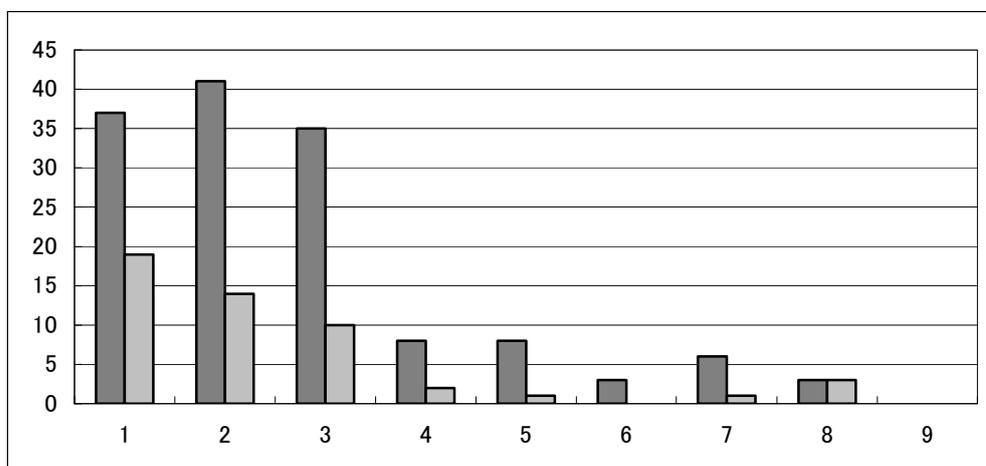
- 1 英語の歌 : 10 人 2 ゲーム : 18 人 3 会話 : 6 人
 4 単語の指導 : 9 人 5 文字の指導 : 2 人 6 基礎的な文法の指導 : 6 人
 7 絵本の読み聞かせ : 1 人 8 特にない : 19 人 9 その他 : 1 人

特に教員が指導を得意だとするものの上位は、歌とゲームと単語の指導の 3 つである。これら 3 つの事項については他と数の上で大きく差が開いている。しかしそれぞれ、10 人 (20.4%), 18 人 (36.7%), 9 人 (18.4%) が挙げるのみで、絶対数としては、さほど多いものではない。やはり、「特にない」の 19 人 (38.8%) という人数が最大であることが動かしがたい事実である。

16 あなたが行いたい活動はどれですか。行いたい順に 3 つ教えてください。

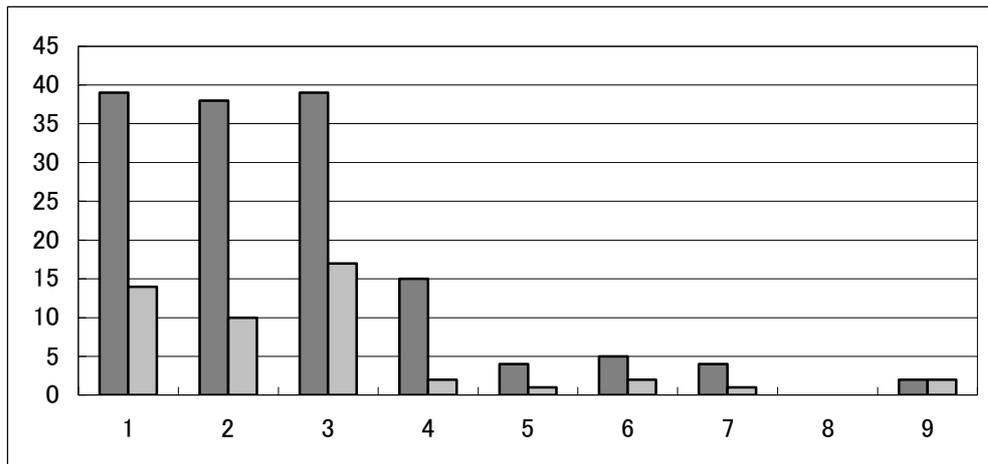
- 1 英語の歌 : 37 人(19 人) 2 ゲーム : 41 人(14 人) 3 会話 : 35 人(10 人)
 4 単語の指導 : 8 人(2 人) 5 文字指導 : 8 人(1 人)
 6 基礎的な文法の指導 : 3 人(0 人) 7 絵本の読み聞かせ : 6 人(1 人)
 8 特にない : 3 人(3 人) 9 その他 : 0 人(0 人)

*人数は合計選択数, ()内は第一選択数, 以下 17~19 も同様



17 小学校英語の内容として必要と思われるものは何ですか。必要度が高いと思う順に3つ教えてください。

- 1 英語の歌 : 39人(14人) 2 ゲーム : 38人(10人) 3 会話 : 39人(17人)
 4 単語の指導 : 15人(2人) 5 文字指導 : 4人(1人) 6 基礎的文法指導 : 5人(2人)
 7 絵本の読み聞かせ : 4人(1人) 8 特にない : 0人(0人) 9 その他 : 2人(2人)



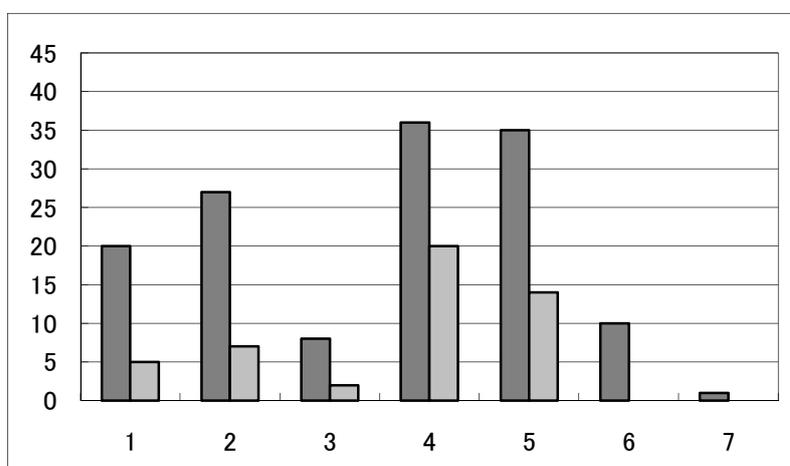
問15から問17を合わせて考察する。小学校教員の小学校英語活動についての意識が明確に出ているところであるだろう。特に、自分が得意であり指導してみたい、必須であるとする事項のいずれにも重なるのが、歌とゲームの2つであり、それぞれ、37人(75.5%)、41人(83.7%)が指導できたらと希望し、それぞれ、39人(79.6%)、38人(77.6%)が必要な事項と考えている。一方、得意だと言う人は多くなかった会話についても、35人(71.4%)が指導したいと思ひ、39人(79.6%)が必須と考えている。一方で、単語や文字の指導は、指導を希望する人数も、必要性を認める人数も、絶対数としては多くない。単語の指導に関しては、得意と思ひ、必要と感じる人がある程度はいる一方で、行いたい活動としては上位となっていない。

問15での上位にある歌とゲームは、指導希望と必要性のどちらにおいても、教員は重要な事項として受け止めているが、興味深いのは、特に、会話を指導してみたいと思ひ、必要だと思ふ数が顕著に増えていることである。小学校教員にとって、得意ではないが、やはり英語活動では会話が重要だという意識がきわめて大きいことが表れたと考えられる。

18 小学校の英語教育の体制づくりについて、必要なものは何ですか。必要度が高いと思う順に3つ教えてください。

- 1 毎週の授業 : 20人(5人) 2 公的研修 : 27人(7人) 3 教科にする : 8人(2人)
 4 専科教員の配置 : 36人(20人) 5 ALTの配置 : 35人(14人)

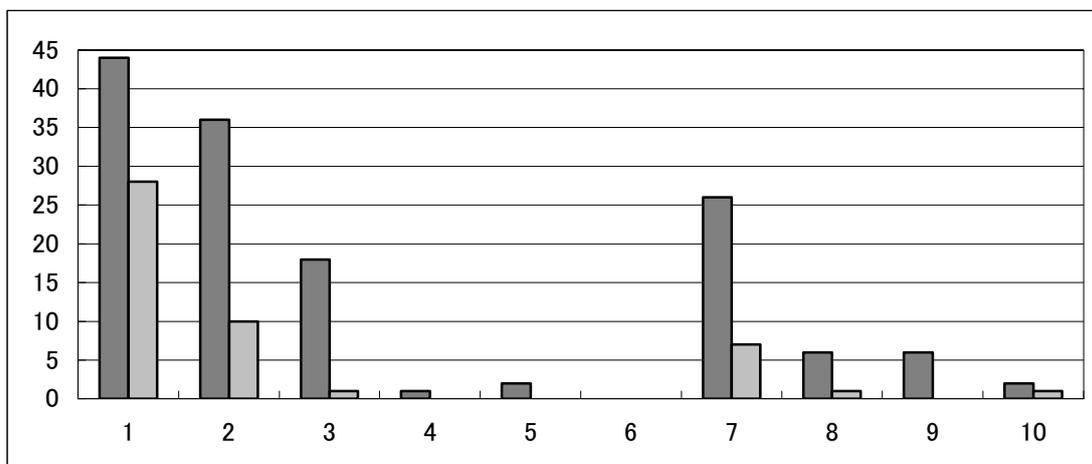
6 教科書 : 10 人(0 人) 7 その他 : 1 人(0 人)



特に顕著な数字になっているのが、専科教員の配置 36 人 (73.5%)、ALT の配置 35 人 (71.4%) であり、次いで、公的研修 27 人 (55.1%)、毎週の授業を確保すること 20 人 (40.8%) が挙げられている。これらは重要性で 1 位に挙がる事項とも一致している。これらは、英語活動の指導は、担任が単独で指導可能なものではなく専門的なものであると見なしている意識の表れと理解できる。

19 いまの小学校英語で育つ力はどれですか。そう思う順に 3 つを選んでください。

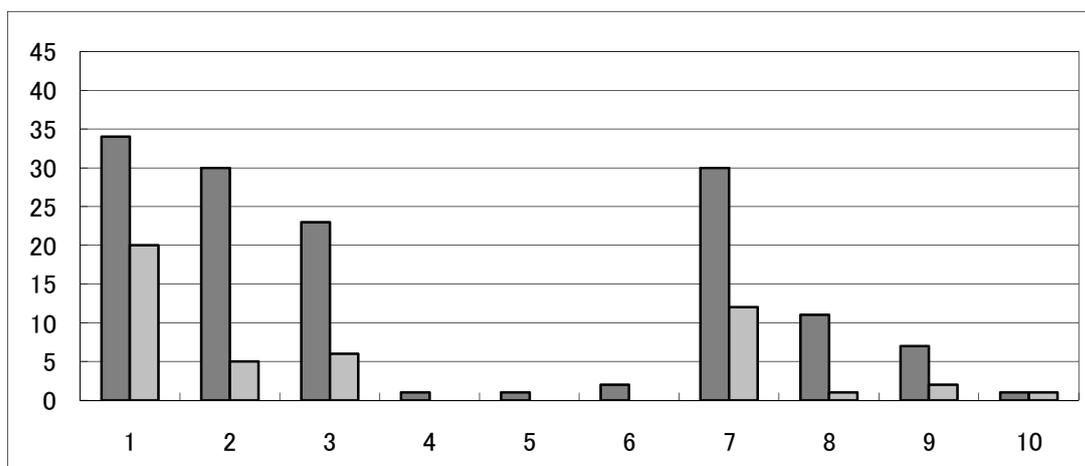
- 1 英語の音やリズムに触れたり慣れたりすること : 44 人(28 人)
- 2 英語を聞くこと : 36 人(10 人) 3 英語を話すこと : 18 人(1 人)
- 4 英語の語句を読むこと : 1 人(1 人) 5 アルファベットを書くこと : 2 人(0 人)
- 6 英語の語句を書くこと : 0 人(0 人)
- 7 外国の文化や生活について知ったり、外国の人と交流すること : 26 人(7 人)
- 8 ことばによる人間関係を円滑に構築できること : 6 人(0 人)
- 9 自己を表現する意欲を養うこと : 6 人(0 人) 10 その他 : 2 人(1 人)



小学校教員にとって、英語の音やリズムに触れ慣れること 44 人 (89.8%)、英語を聞くこと 36 人 (73.5%) と、音声言語を重視していることが明確に現れている。第 3 位は異文化理解・異文化交流であり、この 3 点においては、平成 10 年度版学習指導要領の「総合的な学習の時間で述べられている「国際理解教育の一環としての外国語会話等」という部分や、中央教育審議会の「審議のまとめ」(2007) に示されたことと合致している。英語を話すこと 18 人 (36.7%) は、重要度 1 位として挙げた人は多くなかったが、総合で 4 位に入っている。

20 今後、小学校で育てるべき英語の力は、何だと考えますか。上の 1～9 から最も大切だと思う順に 3 つを選んでください。

- 1 英語の音やリズムに触れたり慣れたりすること : 34 人 (20 人)
- 2 英語を聞くこと : 30 人 (5 人)
- 3 英語を話すこと : 23 人 (6 人)
- 4 英語の語句を読むこと : 1 人 (1 人)
- 5 アルファベットを書くこと : 1 人 (1 人)
- 6 英語の語句を書くこと : 2 人 (0 人)
- 7 外国の文化や生活について知ったり、外国の人と交流すること : 30 人 (12 人)
- 8 ことばによる人間関係を円滑に構築できること : 11 人 (1 人)
- 9 自己を表現する意欲を養うこと : 7 人 (2 人)
- 10 その他 : 1 人 (1 人)



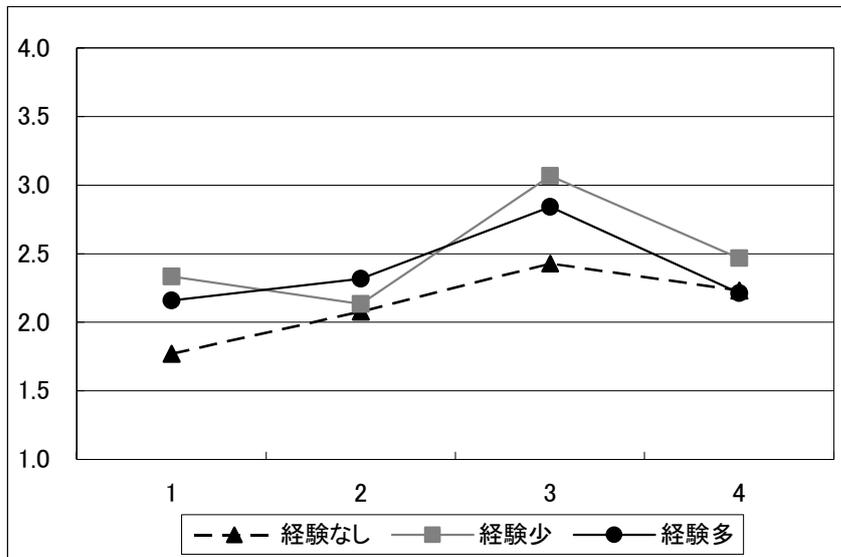
ここでも、問 19 と同様の傾向が現れた。問 19 に比べて回答が分散しており、上位の 2 つの 1「音やリズム」と 2「聞く」については少し減少、7「外国の文化や生活」は増えて 2 と同数の 2 位となった。また、3「話すこと」や 8 と 9 の異文化に関する回答についても増えている。小学校教員の意識においては、英語の音に触れ慣れること、英語を聞いて理解すること、英語を話すこと、異文化を理解し、異文化と交流すること、この 4 点について重視しているということになる。

2.1 学級担任に望まれる役割については、どのように考えますか

- 1 英語授業の主たる指導者として
- 2 A L T や専科の英語教員と同等の立場で
- 3 A L T や専科の英語教員の助手としての立場で
- 4 英語の教育には直接かわらず、児童の管理をする立場で

* () 内は標準偏差, 以下同様

	【経験なし】		【経験少】		【経験多】	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1	1.77	0.73	2.33	1.05	2.16	0.96
2	2.08	0.86	2.13	0.74	2.32	1.00
3	2.43	1.02	3.07	0.70	2.84	0.90
4	2.23	1.09	2.47	0.92	2.21	1.13



問 21 からは、リッカート法による 4 段階での回答を求めている。上記の 1～4 では括弧内の数値は標準偏差を示している。以下問 22～30 まで同様の表記とする。

プロフィールの「小学校英語にかかわった（ている）経験」への回答にもとづき、次のように 3 群に分け分散分析を行った。ただし、サンプル数が少ないこともあり、有意な交互作用は見られなかったため、グラフから傾向を求めることに留めることとする。

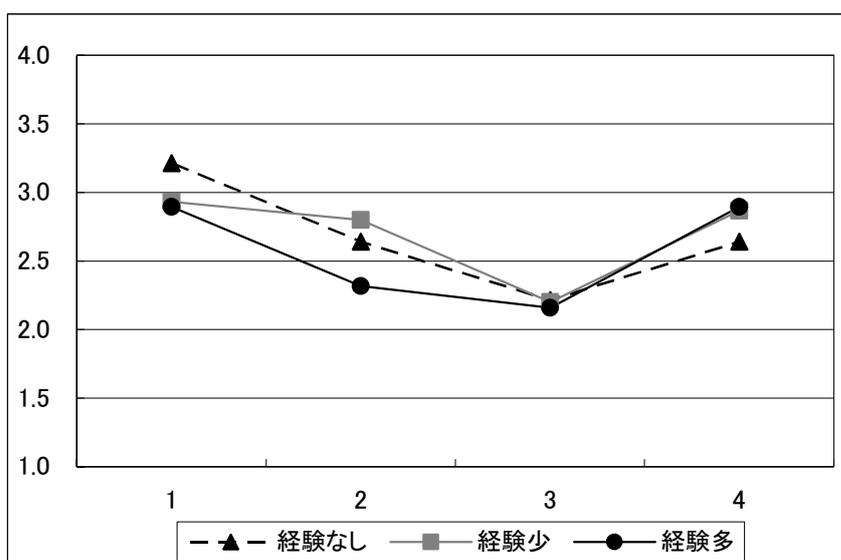
小学校英語経験：	「経験なし」群	14 人
	「経験少（1～2 年）」群	15 人
	「経験多（3 年以上）群	19 人

問 21 では、小学校教員は、英語活動指導経験の多寡にかかわらず、学級担任が英語活動での主たる指導者であったり、同等の立場で指導することよりは、ALT や専科教員の助手的立場で授業に参加することを望んでいる傾向がある。また、これら 4 項目のいずれにおいても、英語活動指導経験のある教員に比べて、経験のない教員は「そう思う」と明確に答えるのをためらっているようである。指導実践を通して小学校教員は授業における自分の役割を確認していると言えよう。

2 2 教室内で使用する言語は、どのように考えますか

- 1 指導者、児童もできるかぎり英語を使う
- 2 指導者は英語を使うが、児童は日本語を使ってもよい
- 3 指導者は必要に応じて日本語を使うが、児童は英語を使う
- 4 指導者、児童も必要に応じて、日本語を使ってもよい

	【経験なし】		【経験少】		【経験多】	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1	3.21	0.97	2.93	0.59	2.89	0.94
2	2.64	1.01	2.80	0.77	2.32	1.00
3	2.21	0.58	2.20	0.77	2.16	0.90
4	2.64	1.08	2.87	0.92	2.89	0.88

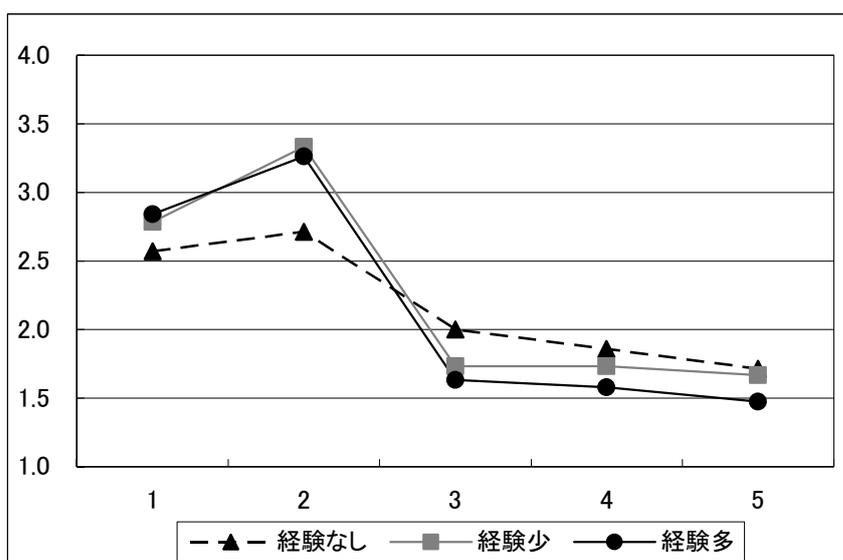


問 22 においては、教員も児童もできる限り英語を使うことを重視しているという結果が出た。指導者は必要に応じ日本語を使い児童は英語を使うという考え方は現実的でないと受け取られたようで支持が少ない。また、指導者は英語だけを使い児童は日本語を使ってもよいとする考え方は、指導経験の多い教員の支持をあまり得ず、経験の少ない教員や経験のない教員の支持を得た。実際の小学校の活動の様子に触れていない方が、英語活動は児童にとって難しいものであると受け止めているように思える。

2 3 評価の方法としては、どのように考えますか

- 1 児童の製作物（ワークシート，ノート，作文，絵など）
- 2 発表や話し合いなどの活動状況を観察する
- 3 各校で作成するテスト
- 4 市販の客観テスト
- 5 外部機関による英語資格テスト

	【経験なし】		【経験少】		【経験多】	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1	2.57	0.76	2.79	0.70	2.84	1.01
2	2.71	0.61	3.33	0.49	3.26	0.81
3	2.00	0.78	1.73	0.70	1.63	0.76
4	1.86	0.66	1.73	0.70	1.58	0.77
5	1.71	0.73	1.67	0.72	1.47	0.77

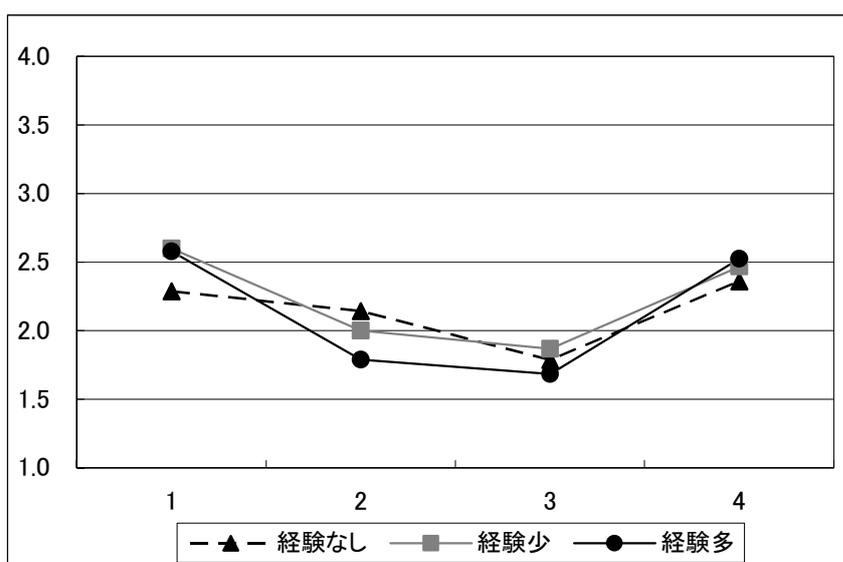


問 23 は評価についての質問項目である。特に指導要録へ記録するという意味での成績付けではなく、授業での児童への指導の効果を確認し、指導内容、指導方法、指導手順を振り返り、さらに先の授業の向上へとつなげるために、評価は必要であるとする立場に立っての質問項目設定であった。しかしその意図は回答者に伝わったかどうか不明である。この項目に対しては、教員はその経験の多寡にかかわらず、活動状況を観察することや具体的製作物といったポートフォリオ的な活動成果を蓄積することを支持した。とりわけ、経験のある教員では授業中の観察を高い割合で重視している結果となった。

2 4 児童の評価をどのような手段で保護者に伝えますか

- 1 文章にして児童の学習の様子や成果を知らせる
- 2 段階別評価を用いて連絡する
- 3 客観テストの結果を連絡する
- 4 英語活動の様子をビデオ撮影などして、保護者会で見せる

	【経験なし】		【経験少】		【経験多】	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1	2.29	0.83	2.60	0.91	2.58	1.07
2	2.14	0.77	2.00	0.93	1.79	0.92
3	1.79	0.70	1.87	0.74	1.68	0.89
4	2.36	1.08	2.47	0.99	2.53	0.96

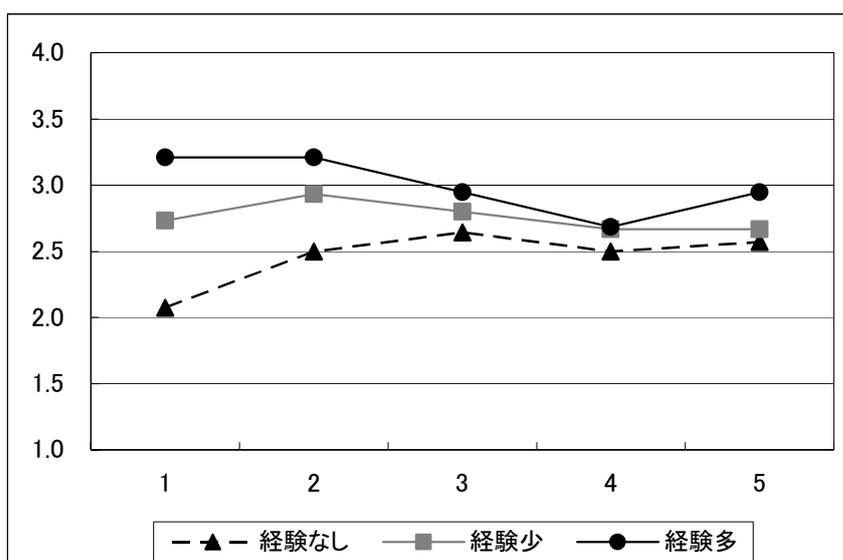


問 24 については、文章やビデオ撮影による報告が最も支持を得た。未経験者は、文章での評価報告に対して積極性がやや低く、その分、段階的評価を志向する傾向が高く出た。段階別評価や客観テストによる評価については、経験者においてより、重要視していない結果となった。経験者は、英語活動の状況が段階的評価やテストによる評価になじまないという体験的観察に基づいて判断している可能性がある。

2 5 小学校教員の研修の在り方として、どのように考えますか

- 1 初任者研修に位置づける
- 2 校内研修を充実する
- 3 校外の研修（国，県，市町村など公的機関などの主催）に参加する
- 4 校外の研修（民間団体や民間企業などが主催）に参加する
- 5 校外の研修（近隣の大学が主催）に参加する

	【経験なし】		【経験少】		【経験多】	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1	2.07	1.07	2.73	0.96	3.21	1.08
2	2.50	0.85	2.93	0.88	3.21	0.85
3	2.64	0.74	2.80	0.86	2.95	1.08
4	2.50	0.76	2.67	0.82	2.68	1.16
5	2.57	0.65	2.67	0.82	2.95	1.08

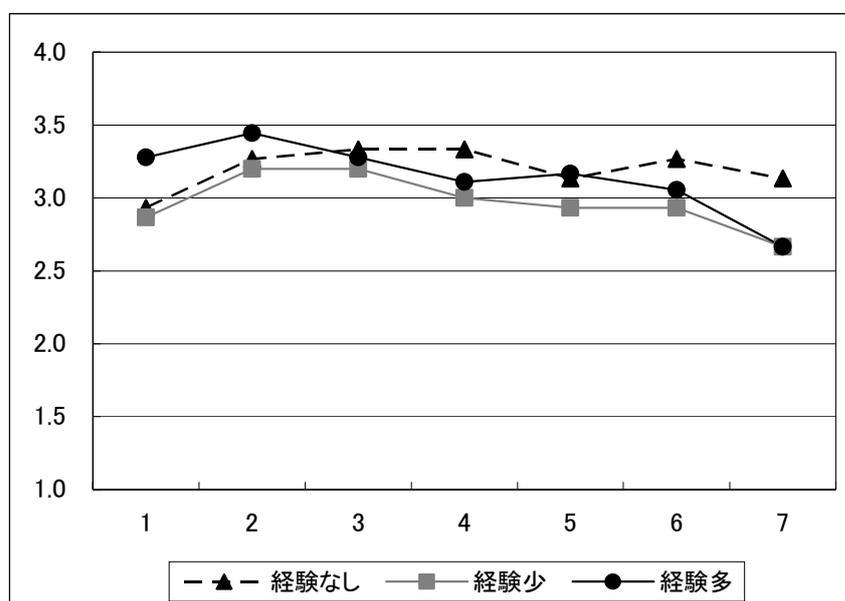


問 25 については、初任者研修と校内研修についての考え方には、経験者と未経験者で顕著な差が表れた。しかしこれを除いたすべての項目に経験者、未経験者とも同レベルの支持が集まった。特に、経験者ほど初任者研修と校内研修を重視しているという結果が出たが、それは、指導の体験を通して、校内や地域内での実践のばらつきに対して意識が向き、校外の研修で個人的に技術を磨くことよりも、同僚と共同歩調を取ることの重要性に重きを置いて回答したのではと思われる。

2 6 どのような研修を受けたいですか

- | | |
|--------------------------|------------|
| 1 英語力の向上 | 2 指導技術・方法 |
| 3 教材の選択・選定 | 4 指導案・指導計画 |
| 5 A L T などとのコミュニケーションの仕方 | |
| 6 ティーム・ティーチングの方法 | 7 評価の方法 |

	【経験なし】		【経験少】		【経験多】	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1	2.93	0.70	2.87	0.83	3.28	0.83
2	3.27	0.70	3.20	1.01	3.44	0.70
3	3.33	0.62	3.20	0.86	3.28	0.89
4	3.33	0.62	3.00	0.93	3.11	0.68
5	3.13	0.64	2.93	0.96	3.17	0.71
6	3.27	0.59	2.93	0.88	3.06	0.73
7	3.13	0.64	2.67	0.98	2.67	0.84



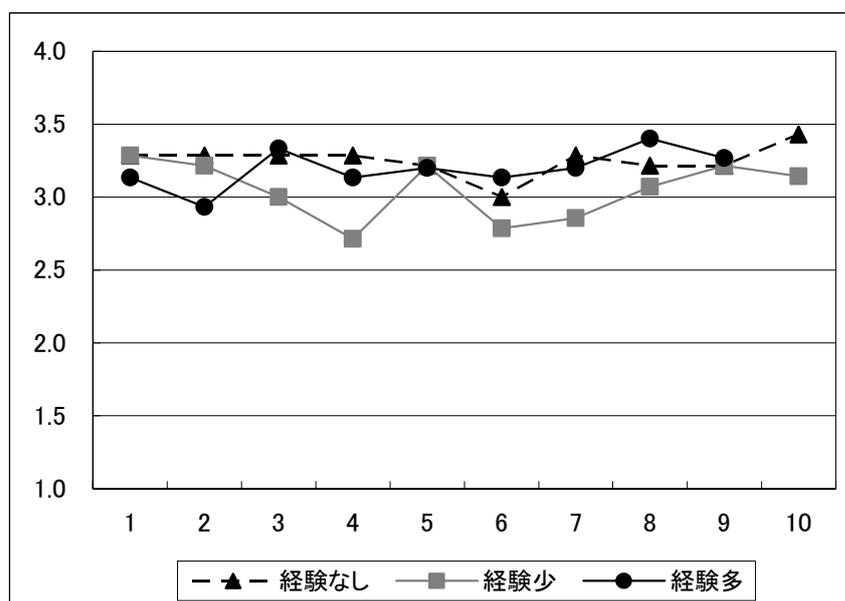
問 26 では、いずれも高いニーズであったが、指導経験のある教員が左下がりのラインを描き、経験のない教員は平坦な状態のラインになっている。特に長く経験のある教員とあまりない教員の差は、英語力の向上について表れている。実際に英語活動を指導すればするほど、自己の英語力向上や英語指導力向上の必要性を一層意識するのではないだろうか。一方、経験の少ない教員は指導案、指導計画により目が向いている。また、経験のない教員に評価に関しての研修を求める意識が高い傾向にあるのは、実践体験がない分、自分自身が経験した中学校以降の英語教育の指導法や評価のイメージが影響している可能性があるように思える。

2.7 小学校の英語教育の、以下のような課題についてはどのように考えますか

- | | |
|--------------|--------------|
| 1 教材の選定・入手方法 | 2 カリキュラムの構築 |
| 3 教育内容の明確化 | 4 指導者の英語運用能力 |

- | | |
|------------------|---------------|
| 5 指導者の指導技術 | 6 地域格差・学校格差 |
| 7 時間数の確保 | 8 授業準備時間の確保 |
| 9 ALT等との打ち合わせの確保 | 10 ALT等の人材の確保 |

	【経験なし】		【経験少】		【経験多】	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1	3.29	0.73	3.29	0.73	3.13	0.83
2	3.29	0.73	3.21	0.70	2.93	0.88
3	3.29	0.73	3.00	0.88	3.33	0.82
4	3.29	0.73	2.71	0.99	3.13	0.64
5	3.21	0.80	3.21	0.89	3.20	0.56
6	3.00	0.96	2.79	1.05	3.13	0.92
7	3.29	0.61	2.86	0.86	3.13	0.83
8	3.21	0.70	3.07	0.83	3.20	0.77
9	3.21	0.70	3.21	0.89	3.40	0.51
10	3.43	0.76	3.14	0.95	3.27	0.70

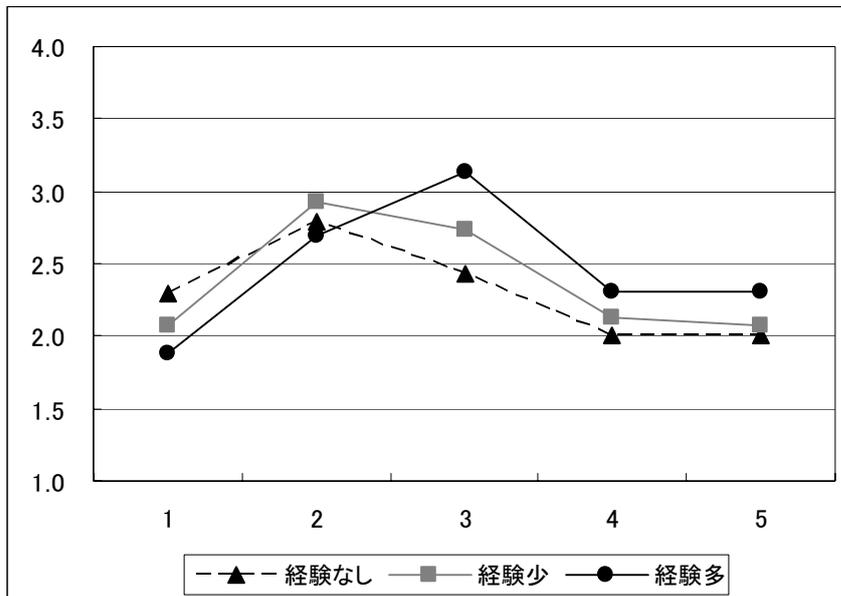


いずれの項目についても、経験者・未経験者を問わず、小学校教員が意識を強く向けており、問題視していることが見て取れる。4「指導者の英語運用能力」についてと7「授業時間数の確保」は、経験の少ない教員と未経験の教員の間で差が開いたが、実際に活動を行ってみると、意外と英語力が要求されないことに気がつくが、経験が増えるにつれ、行いたいことも増え、英語力や時間数の不足に悩むようになるのかもしれない。

2 8 小中連携について、次のような文字や単語の指導についてはどのように考えますか

- 1 文字や単語は一切見せない、読ませない、書かせない
- 2 文字や単語を見せてもよいが、教えることはしない
- 3 文字や単語を読ませる
- 4 文字や単語を書かせる
- 5 文字や単語が読めるようにルールを教える

	【経験なし】		【経験少】		【経験多】	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1	2.29	0.83	2.07	0.70	1.88	0.62
2	2.79	0.89	2.93	0.88	2.69	0.95
3	2.43	0.94	2.73	0.80	3.13	0.81
4	2.00	0.78	2.13	0.74	2.31	0.79
5	2.00	0.88	2.07	0.80	2.31	0.70



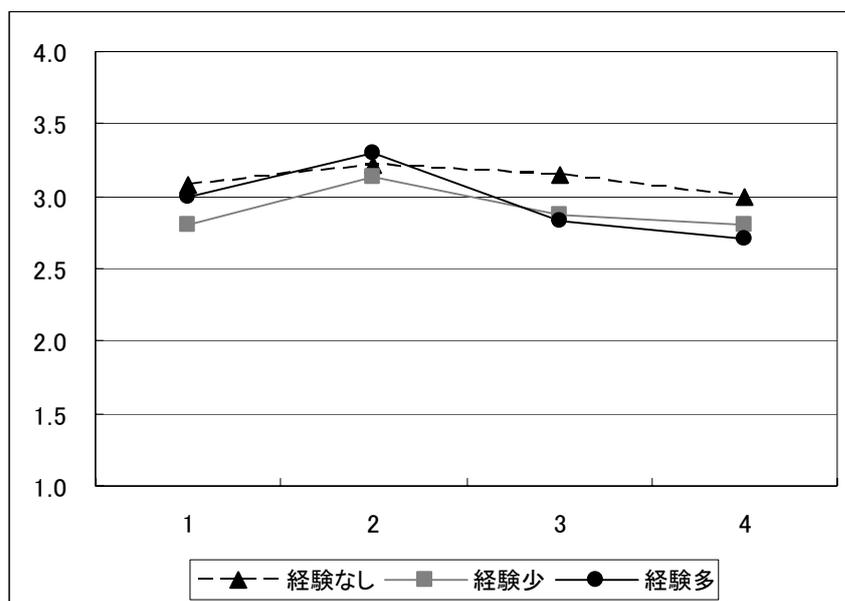
文字指導については、経験の有無や多寡にかかわらず、単語を見せることや読ませることに対して積極的であることが結果に出た。特に3「読ませること」については、経験のある教員と未経験教員・経験の少ない教員で差が表れ、経験のある教員ほど読ませたいという意識を高く持っていることが明らかになった。もちろん、これを支持した回答者の中にはアルファベットは読ませても単語までは読ませないとする教員も含まれている可能性がある。文部科学省が新学習指導要領で意図している文字指導はアルファベットの認

識のみで留めるという姿勢とはせめぎ合う箇所であり，中学校英語の指導内容との連携を考える上でひとつの大きな要素になることであろう。

2.9 小中連携のための協力体制について，どのように考えますか

- 1 同じ学区内で，中学校教員が小学校教員に，アドバイスをを行うこと
- 2 中学校派遣のALTが，小学校も訪問し，アドバイスをを行うこと
- 3 小学校の学習状況を中学校に申し送ること
- 4 小学校と中学校との間で連絡会などを行うこと

	【経験なし】		【経験少】		【経験多】	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1	3.07	0.73	2.80	0.86	3.00	0.61
2	3.21	0.70	3.13	0.64	3.29	0.85
3	3.14	0.53	2.87	0.74	2.82	0.81
4	3.00	0.68	2.80	0.86	2.71	0.77

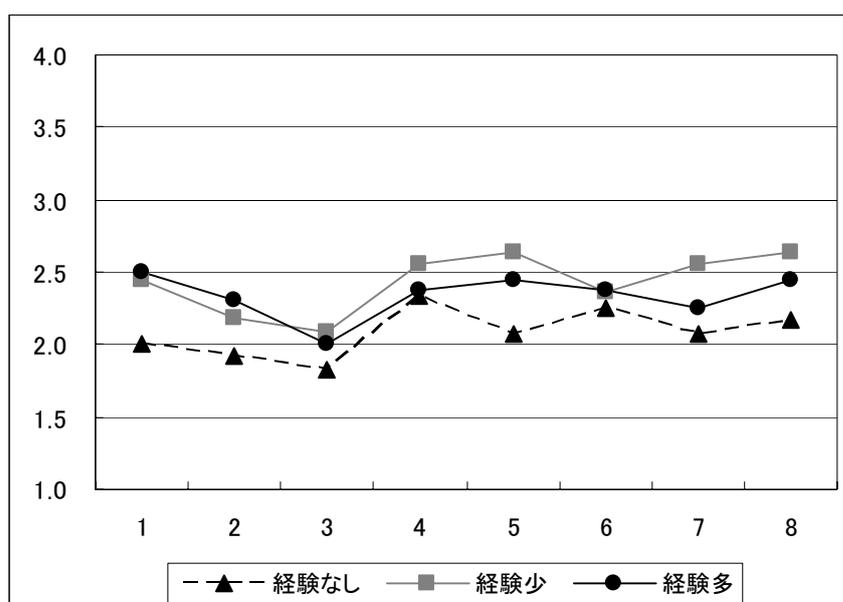


いずれの項目についても経験者と未経験者に関わらず高い値を示しており，中学校との連携を求めていることが明確になった。特に小学校現場へのALT訪問は他の項目よりも重要視されているが，中学校教員の指導する英語と小学校英語活動は違うということへの意識，そして自分らの英語だけでは不安であるといった心理があつて，2が高い結果を示していると思われる。

30 一般的に、中学校へ波及すると予想されることがらについて、どう考えますか

- 1 英語を最初から始める必要がなくなり、時間にゆとりが出るだろう
- 2 ゆとりが出た分、これまでより深く教えることができるようになるだろう
- 3 ゆとりが出た分、中学校で高校の内容まで扱えるようになるだろう
- 4 聞く力がついたので英語で授業がしやすくなるだろう
- 5 話す力がついたので英語で授業がしやすくなるだろう
- 6 語彙力が豊かになって、読んだり書いたりする授業がしやすくなるだろう
- 7 既に学んでいるぶん新鮮味がなく、関心や意欲が少なくなるだろう
- 8 既に学習差が認められ、授業がしにくくなるだろう

	【経験なし】		【経験少】		【経験多】	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1	2.00	0.74	2.45	0.69	2.50	0.97
2	1.92	0.67	2.18	0.60	2.31	0.95
3	1.83	0.58	2.09	0.94	2.00	0.89
4	2.33	0.65	2.55	0.69	2.38	0.62
5	2.08	0.67	2.64	0.92	2.44	0.73
6	2.25	0.75	2.36	0.67	2.38	0.81
7	2.08	0.67	2.55	0.93	2.25	0.68
8	2.17	0.84	2.64	0.92	2.44	0.73



総じて、平均値が半分の 2.5 を下回っている結果となり、小学校教員は小学校英語活動

の中学校英語への波及効果について、あまり高い期待を抱いていないか、意識の外にあるようにすら思われる。また、3については、どのグループでも最も低い結果が出ている。中学校・高等学校の内容が前倒しできるようになるとは、あまり期待されていないということである。さらに、経験のない教員は、どの項目についても低い回答率であり、それほど中学校への波及効果を意識していないか、もしくは、実践経験がなく実際にどのような力を児童が付けるのかをイメージできていないため積極的的回答を控えている可能性が高い。また、指導経験の少ない教員には、中学校での授業がしやすくなるという見込みを持つものと、やりにくくなるという見込みを持つものの両者が比較的高いポイントを示し判断が分かれる結果となっている。

4. まとめ

特に、問 21 以降の設問において、概して、小学校英語活動の経験の有無が教員の英語活動に対する意識に影響を与えることが明らかになった。しかし、経験者と未経験者、経験者のうち経験の少ない者と多い者の差について比較分析を行うにはデータが少な過ぎることもあり、今後研究をさらに進める際には、さらに調査対象を増やし、調査項目を精査していかなくてはならない。

結局、小学校教員にとって中学校への連携はまだ先に送るべきテーマであり、その回答には切迫感がなかった。今後、小学校での英語活動が必修化され、全国的に時間数も確保されるようになる 때가近づいて、始めて小学校の教員の意識に自分たちの送り出す卒業生が中学校でどのような英語を学ぶのかを具体的イメージを持って意識するようになり、このような調査への回答も変化することが予測される。

さらに、新学習指導要領で述べられる、外国語活動は学級担任が中心になって指導を行うとする文部科学省の方針があり、教員たちは、新指導要領への移行期間を通じて領域としての外国語活動の準備を進めながら実践を重ね、その体験に裏打ちされて自らの意識を変えていくことが予測される。

この第1次調査（試行版）を第2次調査（本調査）へと改善するため、項目を精査しなくてはならないいくつかのポイントが明確になった。

特に問 23 と問 24 については、評価の問題を教科的評価と混同されないような配慮をもって設問を書き直す必要がある。また、問 28 については、読ませたり書かせたりするのが単語なのかアルファベットの1文字なのかについて誤解を招かないような配慮をもって選択項目を書き直す必要がある。

また、最後の自由記述については、書き込みがまったくない調査用紙も多くあったが、書き込まれたコメントや意見については、機会を改めて論考する必要がある。

以上、小学校教員対象の第一次調査については、中学校教員対象の第一次調査と合わせて考察することで、小学校教員と中学校教員の意識の差がさらに明確になると思われる。両方の一次調査を合わせての考察は、この報告書の第4章第2部にまとめることになる。